



# 流水



丘木 静夫

—

北国の春の海を、真冬の間海面を埋め尽くした流氷が、今行き場を失って静かに漂っている。

「母さんの具合はどうなんだ？」焼き肉を網からゆっくりとつまみ上げながら武司は尋ねた。焼きが甘いと感じて、肉をもう一度網に押しつけるとジュッと音がして鈍く白い煙が上がった。

武司は札幌に単身赴任していた。自宅は神奈川県横浜にある。四、五日前、妻の京子は脳出血で倒れ、病院に入院していた。今夜は二十歳になる大学生の息子の健治がはるばる武司を訪ねて来たのですすき野にある焼き肉屋に夕食に来たのだった。

「うん、もう意識ももどって大分落ちついたよ」健治は応えてから、ビールを一口飲んだ。

「そうか、よかったな」短く言って武司は唇をグラスにあてた。それきり、会話は途切れて沈黙が二人を支配した。

「親父、お袋のことどう思ってるの？」数分の沈黙の後に健治は切りだした。

「どうって？」うつ向いて肉をつついてきた武司は顔を上げて健治を見た。久しぶりに会った息子の言葉にしては刺があるように思えた。

「どういうことなんだ。何が言いたいんだ」自然に少しきつい言い方になった。

「何でお袋が倒れた時にすぐ帰って来てくれなかったの？」うらめしそうに健治は言った。

「そのことか・・・、仕事が忙しかったんだよ」ムツとしたように武司は応えた。

「仕事が忙しいなんて言い訳にならないよ。お袋が倒れたんだよ。帰って来るのがあたりまえじゃないか」父親のそっけない態度に健治は興奮して言った。

「夫婦といっても、今では形だけのものになってしまった・・・。こっちに来てもう五年だ」興奮ぎみの健治の様子に驚きもせず、武司は自重気味に言った。

「形だけの夫婦か・・・」吐き捨てるような健治の言葉だった。

「何が言いたいのだ？俺に説教するつもりか？」静かな様子から一転して、目をむいて武司は息子の健治を睨んだ。凄んで言うてから、ふと、そんなふうに関に意見を言うようになったのだなと息子を頼もしくも思えた。

「母さんには、付き合っている男がいるんだよ」武司の不愉快そうな顔にたじろぎもせず健治は言い放った。

その勢いに気押されたように武司は健治から目を逸らした。窓の外を見ると、いつの間にか降りだした雪が赤や黄色のイルミネーションに浮かび上がり、最後には黒い点になって落ちて行った。武司は降りしきる雪を見ながらビールを飲み干した。

グラスを置いて武司は口を開いた。

「知っている。尾崎圭一という男だろう。京子のダンスのパートナーだとかいう・・・」言うてからうつ向いた。

「知ってたの？だから、帰って来なかったんだ。その尾崎という男がお袋の病室によく見舞いに来ているよ」ふてくされたように健治は言った。彼はグラスのビールを一気に飲み干した。

武司は、去年家に帰ったとき京子と行った横浜のスナック「マロン」のことを思い出していた。そこで、尾崎圭一はバーテンとして働いていた。五十歳の自分より四、五歳は若いよだと武司は思った。

「うちの旦那よ。こちら、私のダンスパートナーの尾崎さん。いろいろと教えて頂いてるの」京子に紹介されて圭一は、「ご主人ですか、ダンスの発表会の際には奥様にはお世話になっています」と丁寧に挨拶した。

紹介されて、こちらこそ、と武司はお辞儀をした。その後、チャチャとタンゴを二曲ほど京子と圭一は踊った。二人のダンスは息もぴったり合いステップに乱れが見られなかった。それは、二人の間にあるダンスの上だけのことではない男女の結びつきをはっきりと武司に暗示させた。

圭一は如才ない態度で京子に接していた。俺にはないものがこの男にはあると、武司はその時感じた。尾崎圭一が存在を俺に知らせるために京子に誘われたのか、と改めて彼は思った。しかし、すでに圭一に対する嫉妬心はなかった。彼は京子との関係も自分の中では冷えきったものを感じていた。

その時の事を思い出しながら武司は、煙草の煙を一息に吐いた。

「親父にも女の人がいるようじゃないか」突然、健治が矛先を武司に変えた。

「・・・」武司は応えなかった。

「やっぱり、いるんだね」胸のポケットから煙草を取り出すと健治は火をつけた。

「おまえ、煙草を吸うのか？」武司は驚いたように聞いた。

「煙草くらい吸うさ」そう言いながらも、健治は煙に目をしばたたかせた。そして、手に持った「葵」のマッチをちらつかせて言った。

「親父のこっちのマンションにあったんだ。同じマッチが二つも三つもあるから電話してみたんだ。ママが出て俺と親父をまちがえていろいろとしゃべってくれたよ」

「須美子と話したのか……。なんだ、詮索するようなことをして。よけいなことをするな」武司は言ってから、健治から目をそらした。「葵」のママ、須美子とはここ二、三年のつきあいだった。

「それでどうするつもりなんだ。親父は」追求するような健治の言い方だった。

「どうするって、何をどうしろと言うんだ」健治の言い方に憤慨したように武司は言った。親の私生活に息子が口出しするものではないという気持ちが武司にはあった。

「……」健治は武司の強い口調にたじろいだ。反論する言葉がでなかった。

窓の外では相変わらず雪が降り続いていた。だが、路面には積もらず淡く消えていった。まだ浅い春の雪だった。二人の会話が途切れた。

しばらくして、健治が言った。

「おとなは、勝手なんだよ」捨てぜりふのようだった。自分の将来もそんなものかも知れぬという、半ばあきらめた、自嘲気味のつぶやきのようにも聞こえた。また、それがおとなというものと、悟ったような言い方にも武司には聞こえた。

皿の上の焼き肉はまだ残っていたが、二人とも網にのせようとはしなかった。網の上で、黒くこげた肉が煙を上げている。武司は健治のグラスにビールを注ぐと自分のグラスにもゆっくりと注いだ。泡が静かに立った。武司はその泡ごとビールを飲み干した。

「子どもにはわからないだろう。俺のように年をとってみなくては・・・」

窓に当たって溶けて流れる雪を見ながら、考えるふうにして武司は言った。

「ふん、そんなものなのか・・・。俺は極力そうはなりたくないよ」一気にビールを飲み干すと健治は荒々しく席を立った。

「おい、どこへ行くんだ」武司の声が追いすがった。だが、その声が聞こえないかのように、振り向くことなく、健治は店のドアを開けて外に出た。

淡紅色の八重樺が丘の上の緑に映えて咲いている。それは、ようやく訪れた春の気配に萌えはじめた緑に寄り添うような風情であった。

北海道の武司の所から帰った健治は母親の病室を訪ねた。

「母さん、具合はどう？」

「久しぶりね。まだ、立って歩くことはできないけど、前よりはずっといいみたい」京子はベッドの上で寝たまま応えた。

「ちょっと、起こしてちょうだい」

健治は母の背に手をあてて抱き起こした。ベッドはレバーで起きるようになっていたが、だいぶよくなった京子は自力で起きるようになっていた。

「どうもありがとう」礼を言うと、

「だいぶよくなったんだね。良かったじゃない」心からうれしそうに健治が言った。

「札幌にはもう行ってきたの？」何気ない様子で京子は言った。前から、父親に会って来ると言っていたが、しばらく健治が病院に顔を見せなかったので聞いてみた。

「ああ・・・」応えてから、健治はその後を続けず窓の外の青く抜ける空に目をやった。空の色は、まだ冬を思わせるホワイトブルーだった。

「何かあったの？あの人と・・・」京子も健治が見ている病院の白壁に切り取られた何もない空を見た。

「おふくろは、親父のことどう思ってるの・・・」振り向いて健治は言った。

「どうって？」応える言葉が見つからなくて聞き返した。健治は圭一のことを知っているのかしら？うしろめたい不安な気持ちだった。

「わかってるんだ。男がいるのは。病院から出てくるのを何度も見たよ」吐き捨てるように言った。

「そういうのじゃないのよ・・・」京子は言い淀んだ。

「ただ何だい。おふくろの男には違いないんだろ？」強い口調だった。何だか彼女はやくざにでも脅されているような感じがした。

「そんなに人を責めなくてもいいじゃない」思わずヒステリックに言ってしまった。病室は四人部屋だが、ちょうど他の三人の患者が外出している時だったので良かった、と京子は思った。息子とこんな話をしているのを他の人に聞かれるのは堪えられないことだった。健治は京子の剣幕に少したじろいだ。

「親父にも女がいるよ・・・」健治はつぶやくように言った。窓の外に高々と聳える焼却場の煙突から、まるで火山の噴煙のように湧き上がるように勢いよく煙が出ていた。煙は風に流されてどこまでも続いていき、その先は霞になって空の彼方へ消えていった。

「そう、あの人にも・・・。理解されようとは思わないわ」どこか頼りない口調だった。

「どうなってんだろ、まったく」手に負えないというように健治は言った。

「もう、行くよ」立ち上がった。

「どこへ行くの？」京子は心配になって言った。このまま、息子が自分の知らないどこか遠くへ行ってしまうような気がした。



札幌と、この横浜の病院で健治が受けた傷は非常に大きなものであった。ただ、その衝撃を受け止めてそれを咀嚼し消化してしまう力を、既に身につけている自分を健治はうっすらと自覚していた。

彼は、不安そうな顔で見送っている母親に背を向けて病室の外に出た。やりきれない気持ちではあった。「俺は、俺だ。俺は自分の道を、自分の力で生きてやる」小さくつぶやいた。だが、何か測り知れない狂気の世界へ、身も心も避けられない大きな力で引きずりこもうとする、そんな破れかぶれな気持ちがふつつつと湧き起こるのを止められない自分を、健治は強く意識した。

北国の流氷の群は大自然の力を擁して、さらに北へ向かって大きく動き始めた。

京子は、その夜、病院から北海道の夫に電話した。

「はい、小山です」夫が出た。

「健治がそちらへ行ったでしょ」

「ああ、この間来たよ。一緒に飯を食った」疲れたような声だった。

「それで、何か言ってた？」

「何かって？」そ知らぬふりをするように武司は言った。

「私たちのことよ」

「・・・」

「何であなたが見舞いに来ないのかって・・・」

「そんなことか・・・。忙しいって言ってやったよ」くだらぬことだと言わんばかりに、投げ捨てるような言い方だった。

。「忙しいって・・・。私のことはどうなってもいいの？」冷めた、強い口調で京子は言った。

「仕事だからしょうがないだろう」少し憤慨したように武司は言った。女には仕事のことはわからないという口ぶりだった。

「うそ。女の人がいるんでしょ。それで来られないんでしょ」感情的な京子の言葉だった。

「健治から聞いたわ。スナックのママと付き合ってるんですって？」単刀直入に言った。その言葉に、武司も負けずに言い返した。

「おまえにも居るじゃないか。男が・・・」武司は、尾崎圭一のことを思い出していた。

「尾崎さんのこと？」こうなることを予想していた京子は落ち着いていた。

「ああ、健治から聞いたよ。毎日病院に来ているそうじゃないか」皮肉っぽい言い方だった。

「お互いさまね」

「割り切りがいいね。愛してるのか？その男を」聞くまでもないことだが、武司は言葉にして確かめるように言った。

「今のあなたよりもね」強がりではない京子言葉だった。

「そうか、いいじゃないか。そのうちに、また連絡する」突き放すように武司は言って、一方的に電話を切った。

別れ話にはならなかったが、離れて暮らすうちに確実に二人の心が別なものになってしまったのを京子は今さらながら強く感じた。耳の奥にツーンという音を残して武司の電話は切れた。

ベッドに戻ると京子は横になった。疲れが急に病の体を襲ってきた。眼をつぶると、そのまま深い眠りに入った。

透明なカットガラスの中に金色の光がはじけている。広いホールに、シャンデリアが光の花を振りまいていた。どここのホテルかはわからなかったが、ダンスをする数人の男女の姿があった。動けない自分がダンスに行くはずはないのでこれが夢の中であることはうっすらと京子には自覚できた。

ジルバの曲が流れているのが聞こえる。京子は人々の群に近づいて行こうとするのだが、なかなか思うように自分の体が進まない。まるで、自分の体が水の中を進んでいるようではがゆくなる。どんなに進んでも、ある一定の距離を置いて踊る男女の群は京子の前にあった。重い空気をかき分けてやっとたどりついた。そして、人々の顔を適確に見ることができた。

ダンスパーティーでよく見かける人の顔がそこにはあった。背の低い、ずんぐりした体の、ダンスのステップには人一倍口うるさい六十年配の男性。すらっとしてはいるが、顔を見ると明らかに年は七十を越えているだろうおしゃれな婦人。それらの、人たちが楽しそうに微笑みながら踊っている。

いつの間にか、京子自身もその群の中の一員となって踊り始めていた。いままでの移動の重たさに比べて京子は自分の体が羽のように軽く感じられた。相手の男性は、と見ると夫の武司だった。武司とはあまり踊ったことがないので不審に思った。彼は、無表情で口をへに字にして黙々と踊っている。お互いに言葉を交わすことなくそのうちに武司は京子の前から消えた。

曲が変わり、スローなブルースになった。京子の体がすべるように動く。相手の顔を見ると、息子の健治だった。健治もダンスをするのかな？と一瞬疑ったが、これは夢なのだと改めて彼女は気がついた。健治は顔を斜め上に向けたまま、こちらを見ようとしなない。

「健治！」呼びかけてみたが反応はない。彼は、依然上を向いたままである。京子の声が聞こえないらしく、ダンスの教科書通りに斜め上を向いたままである。ツーステップからナチュラルターンに入った。

しばらく踊っていると、京子が回転した途端に曲がタンゴになった。前進して来る顔は夫の武司に替わっていた。彼の顔は横を向いたままである。表情は少し怒っているように京子には見えた。「あなた！」声をかけたつもりだが、武司の表情は動かない。ターンした時、二人の体が重なって、目と目が合った。「もう、終わりにしようか」無感動な武司の声だった。京子は目をそらして横を向いた。その時、すでに彼に無関心な自分の気持ちを、はっきりと彼女は確認した。武司も彼女が無視していると、それ以上は言葉をかけてこなかった。そして、再び彼の体は消えた。

曲がルンバに変わった。濃厚なラブソングのリズムが流れる。京子の体はうねるように動いた。軽く握った手が引き寄せられると、ぼやけていた相手の顔が見えてくる。それは圭一だった。

「寒くない？」と言って、彼はターンの振り向きざまに京子のドレスの肩をやさしく抱いた。彼女は「ええ」と応え、うっとりして、その腕の中に倒れこんだ。

曲はジルバに変わった。黒と黄色のドレスのスカートがくるくると翻った。圭一のステップは軽く、しかもリードはソフトだがはっきりとしていた。二人は相手の目を見つめあって踊った。圭一の目が京子に笑いかける。彼女も微笑を返した。

「いつから来ていたの？」京子は、回転して圭一の手を取ったときに聞いた。

「ずっと君を見ていたよ」手を引き寄せながら圭一が応えた。

京子の体は羽のように軽く、独楽のようにくるくると回った。白く輝く広いホールには他に人影はなく、圭一と京子の二人きりだった。

「俺と一緒にしよう」圭一がささやいた。

「信じてる」京子も応える。

ステップが速くなった。京子は目が回ってきた。夢の中で彼女の意識が薄れていく。ダンスの音楽や人の声が遠くで聞こえるような気がした。京子は、再び深い眠りの海に落ちていった。

#### 四

北海道の夏は短い。すすき野は旅行客で溢れていた。

「盛況だね」武司は久しぶりに「葵」に行った。客のカラオケが薄暗い店内に響いている。

「いらっしゃい」ママの須美子が挨拶する。バイトの平田貴子もカウンター越しに「あら、小山さん」と、武司に気がついて声をかけた。以前より貴子が色っぽくなったように武司には感じられた。

「貴ちゃん、男でもできたのか？きれいになったみたいだよ」武司がふざけたように言うと、

「あら、男の二、三人。もう、とっくに付き合っただわよ」相変わらずあっけらかんと言う。

「それは素早いことで」武司もつられておどけて言った。

「でも、ずいぶん来られなかったわ」待ちわびたというように、ママの須美子が横から来て口をはさんだ。確かに半年くらいになるだろうか、ずいぶん足を運ばなかったなど、武司は自分でも改めて思った。

目に微笑を浮かべて須美子は武司のテーブルの横に座った。貴子がビールを持ってきてグラスに注いで行った。

「奥さん、まだこちらにいらっしゃるの？」須美子が聞いた。

「いや、家に帰ったんだが。その後、病気になって今入院中なんだ」言って、武司はビールを一気に飲み干した。

「まあ、見舞いに行かなくていいんですか？」ビールを注ぎながら須美子が心配そうに武司の目を覗き込んで聞いた。武司も急に真剣な顔つきになって、

「昨日も向こうから電話があったんだけど。正式に別れようかと思ってるんだ」声を低く押し殺して武司は言った。自ずと須美子も真顔になった。

「本当ですか？」武司の目を見つめながら彼女が聞いた。

「本当だ。伊達や酔狂ではない。」言ってから、武司は、テーブルの下の須美子の手を握った。

「本当にしていいの？」彼女の顔が、薄暗い中でも明るくなるのが武司には、はっきりとわかった。

武司はテーブルの下で握った須美子の手を強く握り締めた。それは、弾力はあるが、もう四十を越えた、年を感じさせるものであった。

貴子がビールを持ってきた。

「聞こえたわ。これで、ママも平成の『安部定』にならなくても済む訳ね」他の客を憚って武司の耳元で小声でささやいた。

「おい、よせよ。縁起でもない」打ち消すように言ったが、内心、武司は「安部定」と言われて一瞬冷や汗をかいた。感情的になったら、須美子が何をしでかすかわからないのを、一番良く彼が知っていた。

「あら、私はあんなはしたないことはしないわよ」笑いながら横から須美子は言った。  
「そうね、ママは持てるから一人の男にしつこくすることはないわよね」貴子がビールを注ぎながら言った。  
「その通りだ」武司は一気にビールを飲み干した。  
須美子はそんな二人のやりとりを、幸福の予感をかみしめるように、ただ微笑して聞いているだけだった。  
北極海の流水は、今はその動きを止め、静かにうずくまるライオンの如く深い眠りについているようである。



## 五

京子は十月の末に退院した。家に帰ると、武司から離婚届が送られてきていた。何のためらいもなく、自分の名前を書いて京子はそれを役所に出した。これで全てが終わった、と思った。

しばらくして、京子が圭一に連絡すると「マロン」に呼ばれた。

「やあ、久しぶり」マロンのカウンターの中から尾崎圭一が声をかけてきた。

「お久しぶり。やっと外に出られるようになったわ」そう言って腰をかけた。

「いつものでいい？」圭一は飲み物を聞いた。

「そうね、薄めにね」ここで、いつもカンパリソーダを京子は飲んでいた。

「圭一さん、踊りましょうか？」京子が言うと、グラスをカウンターに置いて、圭一はちらっと京子を見つめた。

「いいよ、踊りましょう」圭一は言って、カウンターからするりと外に出た。

二人はフロアーの真ん中に出てステップを踏んだ。曲は軽快なジルバだった。病み上がりとも思えないほど、京子の体は圭一のリードで軽やかに回った。

曲がラテンに変わり、それからブルースになった。手を組んだときに京子が小声で言った。

「しばらく、私と旅行しない？」

「店を休んでかい？」圭一も小さな声になった。

「ええ、二、三日でいいけど。山梨か、長野あたりの鄙びた所へ」自分でも不思議なくらい甘えるような声になった。「かまわないけど。何かあったの」そんないつもと違う京子を、受けとめるように圭一は言った。「夫が離婚届を送ってきたわ。私も名前を書いて役所に出したの。息子の健治も、もう大学生だし、この辺が潮時かもしれないわ」

圭一の動きが一瞬止まった。とうとう来るべきことが来たのを、彼は身にしみて感じた。

「旅行、一緒に行こう」今まで心の中にわだかまっていたものを吹っ切るように、圭一は言った。彼は京子の体を支える手に力をこめた。そして、次のステップを大きく踏み出した。

いつしか、他の客は帰ってしまった。十二時を回っていた。

店の照明を落とし、二人は外に出た。圭一は店のドアの鍵をかけた。

深夜の道には人影はなく、秋の明るい月が雲の切れ目から顔を出していた。終電もすでに行ってしまった。圭一と京子は、歩みを止めることなく果てしなく続く道を歩き続けた。

北国の海には、流氷の群が、凍てついた大地を震わせて静かにゆっくりと、だが、確実に近づいていた。

了